

ビワ生育情報

千葉県
平成22年3月号

平成22年2月の気象

平成22年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第2、第5及び第6半旬で平年を上回り、中でも第6半旬は平年より4.5 高かった。月平均気温は6.5 で、平年より0.2 高かったが、前年より1.2 低かった。

氷点下日数は第1～第4半旬でみられた。月合計は9日で、平年と同程度であったが、前年より6日多かった。

最低極温は第3半旬を除く全ての半旬で平年と同じか上回った。2月14日には-2.5 を記録し、この冬一番の冷え込みであった。

降水量は第2半旬に降雨がなかったが、第1、第3及び第6半旬で平年を上回った。月合計は164mmで平年の1.8倍、前年の2.5倍であった。

日照時間は第2及び第5半旬を除く全ての半旬で平年を下回った。月合計は111時間で、平年の74%、前年の88%であった。

表1 平成22年2月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	気温()			氷点下日数(日)			最低極温()		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	4.9	5.2	7.1	2	2.0	0	-0.8	-1.7	1.7
2	8.2	6.3	6.9	3	1.8	0	-1.4	-1.4	0.7
3	3.6	6.7	11.2	2	1.8	0	-2.5	-1.5	1.2
4	3.6	6.3	7.2	2	1.5	2	-0.7	-1.1	-0.3
5	9.3	6.7	7.4	0	1.2	1	2.2	-0.5	-0.5
6	11.5	7.0	5.9	0	0.9	0	3.4	0.2	2.9
平均/計/最低値	6.5	6.3	7.7	9	9.2	3	-2.5	-3.2	-0.5

: 2月の過去36年間の最低極温の平均

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(時間)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	16	12	0	19	29	25
2	0	13	0	32	28	33
3	53	9	5	6	27	24
4	4	27	29	18	26	24
5	2	19	16	31	26	17
6	90	12	17	5	16	3
合計	164	93	66	111	151	126

4月の作業 (果実の発育は次ページ)

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。3月に続き、摘果・袋掛けが重要な作業になり、4月中には終わりたい。

摘果・袋掛け

寒害が見られる園では、幼果の生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長く、果皮に張りがないものは被害果の可能性が高い。被害果の症状を見極めてから効率よく摘果作業を進める。

がんしゅ病の予防

袋掛けが終了した後、収穫が始まるまでに防除指針に従って銅剤を予防散布する。幹や枝に薬液が充分にかかるようにする。

除 草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草をすませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

樹及び花房の発育

暖地園芸研究所におけるビワの開花期は表2に示した。開花始期は、「楠」及び「田中」は平年よりそれぞれ1日、2日早かったが、前年よりそれぞれ3日、5日遅かった。「大房」は平年より5日、前年より3日早かった。

開花盛期は、「楠」及び「田中」は平年よりそれぞれ7日、10日早かったが、前年よりそれぞれ7日、2日遅かった。「大房」は平年より5日、前年より12日遅かった。

開花終期は「楠」が12月18日、「大房」が2月16日、「田中」が1月21日であった。「楠」は平年より14日早かったが、前年より6日遅かった。「大房」及び「田中」は平年よりそれぞれ16日、5日遅かったが、前年よりそれぞれ1日、5日早かった。

開花の進みは「楠」及び「田中」が開花盛期まで平年より早かったが、年末から1月中旬までの気温が平年より低かったため、開花終期は「楠」を除き、平年より遅れた。また2月まで厳しい寒波もなく、寒害の発生はあまりみられない。

表2 ビワの開花期 (暖地園芸研究所)

品 種	開花始期(月.日)			開 花 盛 期			開 花 終 期		
	本 年	平 年	前 年	本 年	平 年	前 年	本 年	平 年	前 年
楠	11. 8	11. 9	11. 5	11.23	11.30	11.16	12.18	1. 1	12.12
大 房	11.20	11.25	11.23	12.27	12.22	12.15	2.16	1.31	2.17
田 中	11.11	11.13	11. 6	11.29	12. 9	11.27	1.21	1.16	1.26

平年：1982年～2008年の27年間の平均

2月26日時点で寒害の被害をまぬがれたビワ幼果の生存率は表3に示した。樹冠外側の生存率は「楠」が86%、「大房」が88%、「田中」が97%であった。いずれの品種も平年より高かった。樹冠内側の生存率は3品種ともに100%であった。いずれの品種も平年及び前年と同じか高かった。樹内外の平均生存率は「楠」が93%、「大房」が94%、「田中」が98%であった。いずれの品種も平年より高かった。

暖地園研では2月28日までに最低極温の - 3 以下の日が一度もなかったが、本年は開花の進みが平年よりやや早く、発育の進んだ幼果が多いため、寒害の被害がわずかにみられた。

果房は充実していて樹の生育も順調である。本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で平年よりやや多いが、今後の発生予察情報を参考にす。また、カメムシの発生の多い園では、4月以降ビワ園への飛来に注意を要する。

表3 ビワ幼果の生存率 (暖地園芸研究所)

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側			平 均		
	本 年	平 年	前 年	本 年	平 年	前 年	本 年	平 年	前 年
楠	86	60	93	100	93	100	93	76	96
大 房	88	83	99	100	94	99	94	88	99
田 中	97	83	95	100	97	100	98	89	97

調査：2月26日

平年：1998年～2009年の12年間の平均

【生育情報の問合せ先:千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>